

話し言葉における「トイウコトダ」の諸相

加藤 陽子

1. はじめに

話し言葉では以下のように様々な箇所引用のマーカである「ト」が現れ、形態上「ト」で終止しているように見える文も多い。

- (1) 本当に日本企業の国際競争力が弱いのですかと、そしてそれを理由にしてね、今多くの改正、ま改革という名のね色々な制度変更がなされようとしておりますけれど、それは本当にあの建前としての国際競争力衰弱というね、これは正しいのかと、もう一度検証していただきたい。(春闘)
- (2) だから私はむしろ父親の持つる戦後というのはむしろ母親にね投影したんだなあと考えたことがありますね、その、私の家に、兄嫁が現れたと、兄と結婚してお嫁さんが家に来たと、そして新婚生活何ヶ月たつと、この、あ、あ兄嫁と兄が夫婦喧嘩始めると、するとね、兄貴が母に呼び付けられてね、「よそから来たお嫁さんをね、泣かせるようなのは男の風上におけない」って、こう母親は言うんです。(家族)
- (3) やはりその情報ディスクロージャー情報の開示についてのやっぱり法律というのをきちっと作って、それをちゃんと実行してもらうと、それからもう一つは結果責任についてそのPL法ですね、この製造物責任で、そのえーもし間違っただけを提供すれば…(規制)
- (4) 知らないよと。

拙稿(1998)では、これら(以下「ト切れ文」と呼ぶ)を以下のようにA～Dの四つに分類し、引用表現が持つ「場の二重性」(砂川(1988))が関与してそれぞれの表現効果を生むと主張した。

A類(上記例(1)に該当)

実質的に、基本的な用法である「…と思う」「…と言う」「トイウ(+名詞)」を表示。

B類(上記例(2)に該当)

発話の内容が現在の発話の場には属さない異場面の「物語」であることを表示。

C類（上記例(3)に該当）

「ということだ」「というわけだ」等のように、先行文脈からの推論過程を経て得られた結果を表示。

D類（上記例(4)に該当）

発言の場を新たに作り、自己の発言を「ト言ッテイルノダ」のように、メタ的なものとして表示。

本稿では、このB類とC類の用法の元になる表現に注目し(注1)、次の点を主張したいと考える。それは、「トイウコトダ」という表現が、ト切れ文のうちB・C類の用法の元になっており、実際の談話では、「トイウコトダ」の「イウコトダ」が省略されて(2)や(3)のようなト切れ文の形に見えるのではないかと、ということである。また更に本稿では、この「トイウコトダ」という表現が直接引用文の「××は「○○」と言う」の下線部に由来したものであると考える。下線部「言う」が実質的な動詞の意味を失い、先行部分(命題)を包み込むモダリティ相当の表現になったものの延長線上に「トイウコトダ」を捉えるのである。

本稿では、談話の中での「トイウコトダ」の使われ方を、B・C類の用法に加え、4節1で考察する伝聞のモダリティを表す用法も含めて観察する。それによって、「トイウコトダ」の性質、各用法の共通点と相違点を明らかにしたいと考える。また、「トイウコトダ」の統語的性質のみならず、それが使われる動機——談話の中で果たす機能——という点にも注目して考察を進めて行きたいと思う。

次節では先行研究として、伝聞のモダリティ「トイウ」について論じた研究、井上(1983)を概観し、本稿で扱う「トイウコトダ」との関連を見ていきたい。

2. 井上(1983)——引用文に由来する表現と談話の中でそれを使う意図

先に挙げた直接引用文の「××は「○○」と言う」の下線部が、引用助詞+動詞としての本来の機能を失って形式化し、他の機能を持つようになったものは、二つある。一つ目は、「規制を撤廃しようという議論」のように、修飾部と底の名詞をつなぐ役割を果たすもので、二つ目は次例のように、伝聞のモダリティ表現としての機能を担うものである。

- (5) 同博士によると、アメリカの警察関係者の銃砲規制への考え方は、私の予想とはうらはらに、むしろ規制反対の気運が強いという。(国弘正雄「アメリカを理解するために(下)」井上(1983:119)より引用)

これについて詳しく考察した井上(1983)では、「トイウ」は間接話法的な性質と直接話法的な性質を兼ね備えた「中間話法」と言われるようなものと説明され、また、書き言葉的な伝聞のモダリティとして位置づけられている。井上(1983:117-119)は、「トイウ」

の特徴として以下の統語的・意味的・文体的な性質を挙げている。

- ① 形が一定で時制や相の変化が見られず、疑問や打ち消しにもならない。つまり動詞としての統語機能を失っている。
- ② 思考動詞「と思う」等と似た形を持ち、「話し手がその情報源から直接得た情報である」という一人称の現在の判断を表す。また、本来の「話す」の意味のみならず、物語・伝説・各種の報告などを引用するのにも用いられる。
- ③ 書き言葉の報告文体に適合する。

更に「トイウ」の談話機能として以下の2点を挙げ、伝聞のモダリティとして働く「トイウ」が、談話の中で重要な役割を果たすと論じている。

- ① 情報源である人物に視点を置き、直接形を用いてその人物の直接体験を語らせ、生彩のある「語り」を構成する。
- ② 談話を構成する幾つかの文を結合させる。つまり、2文以上の文をまとめて一つの引用部にする。

伝聞のモダリティ表現として機能する「トイウ」を取り上げた井上(1983)は、特に以下の二点において本稿に示唆に富むものである。第一点目は、「トイウ」を、引用文との関係で捉えた点である。本稿で扱う「トイウコトダ」も同様に、引用文、特に直接引用文との関係を視野に入れて考察し引用された情報に注目することで、各用法の共通点・相違点が明らかになっていくと考える。第二点目は、「トイウ」の統語的性質を指摘することだけに終わらず、談話の中での情報伝達機能にも着目している点である。同論文では主に「書き言葉の報告文体」に現れる「トイウ」が対象とされているが、引用文に関連する表現を談話の中で使う意図を探るという視点は、様々な種類の話し言葉に頻出する「ト」の分析に際しても大変示唆に富むものである。どんな談話の中で、何のために「トイウコトダ」が使われるのかを観察することによって、「話し言葉」というメディアで情報伝達をする発話者の姿勢も見えてくると思われる。

次節以降、上述の二点に注意を払いつつ、本稿で対象とする「トイウコトダ」について考察を進めていきたい。

3. 本稿の構成

本稿では、拙稿(1998)で挙げたB類(「物語再現」)・C類(「推論結果の説明」)の「ト」が「トイウコトダ」という表現に由来するものであると考え、それぞれを詳しく考察していく。その際、拙稿(1998)では言及していない「××は「○○」と言う」の下線部がモダリティ化した「伝聞」のモダリティを表す「トイウコトダ」もあわせて考察する。

以下4節で、同形態を持つこの三つの「トイウコトダ」の、「トイウコトダ」に前接す

る部分（以下「引用部」）の情報の性質・それぞれが談話の中で果たす機能と効果・出現する談話の種類等の差異を観察する。更に5節で、これら3つの「トイウコトダ」の共通点——これらが基本的には直接引用文の性質を受け継いでいて、談話の中で共通の様式で情報伝達を行う（つまり、「発話以前に入手し発話時点で既に存在する情報を、叙事的にそのまま伝達する」というニュアンスで情報を伝達する）ということ——を述べ、この表現を多用する談話構成上の意図を考察してみたい。

本稿で論証の際に使用する資料は、主に末尾に記した実際の話し言葉の書き起こし資料から取ったもので、出典が銘記されていない場合は筆者の作例である。

4. 三種類の「トイウコトダ」の性質

4.1 伝聞のモダリティ表現「トイウコトダ1」

では以下、井上(1983)の伝聞のモダリティ表現「トイウ」に対応する「トイウコトダ」、拙稿(1998)B類(物語再現)、C類(推論結果の説明)に対応する「トイウコトダ」を順に「トイウコトダ1」、「トイウコトダ2」、「トイウコトダ3」とする。初めに例(6)(7)のような伝聞のモダリティ「トイウ」とほぼ同じ振る舞いをする「トイウコトダ1」から見ていきたい。以下各節、(7)のように「イウコトダ」の部分が省略されト切れ文になった例も併記する。

- (6) 人気アニメ「ちびまる子ちゃん」で知られます漫画家のさくらももこさん33才が夫でアニメプロデューサーの宮永正隆さん38才と別居状態にあることが31日わかったということなんですね。(ワイド)
- (7) 先週言ったけど、リーダーに求めるものは何ですかという世論調査をしたら、日本人はリーダーシップがほしいと言った。一方、欧米人に聞いたら、思いやりがほしいと言ったと。(家族)

4.1.1 「トイウコトダ1」の統語的性質

井上(1983)で挙げられた伝聞のモダリティ「トイウ」の統語的特徴は、本稿で取り上げる「トイウコトダ1」にも同様に認められる性質である。まず、以下の様に形が一定で疑問や打ち消しにはならない。(＊は、日本語として不自然なもの)

- (8) 警察の調べによりますと、丈滉君は祖父母などと一緒に今日葛橋を訪れ、橋のたもとの広場でワイヤーと葛で作られた高さ90センチほどの柵に寄りかかって遊んでいるうちに誤って柵の隙間から転落したということです。(N7)
- (9) ＊警察の調べによりますと丈滉君は柵の隙間から転落したと言うことですか／転落したということではありません。

また、森山(1995:28)と同様のスコープのテストでも、「トイウコトダ1」は代表的な伝

間形式「ソウダ」や「広義伝聞の引用的形式」とされている「トイウ」と同じ振舞いをする。(10)の様に、「トイウコトダ1」のスコープは節としての独立度が高いカラ節の後で途切れることはなく、先行部全てに及ぶ。(以下 { } は、スコープの及ぶ範囲を示す)

(10) {地面がこれだけぬれているカラ今日は運動場は使えない} ということだ。

また、伝聞のモダリティ「トイウ」と同様、「トイウコトダ1」はピリオドを越えて、2文以上の先行部をまとめて引用部として表示することができる。(注2)

(11) 捜査本部の調べによりますと、{毒物混入事件が起きた和歌山市園部地区をしばしば訪れていたいずれも市内に住む45才と35才の男性二人が、事件の前にそれぞれヒ素中毒と見られる症状を訴え、鑑定の結果、ヒ素が検出されました。捜査本部では、二人が交通事故などでこの2年近くの間、7回も病院に運ばれていたことから詳しく調べたところ、45才の男性には平成5年9月に五千万円、35才の男性には平成7年12月に三千万円の生命保険がそれぞれかけられていたことが明らかになりました。この保険は会社が契約者となって従業員に保険をかける企業保険とよばれるもので二人の勤め先となっていた和歌山市内の健康食品販売会社が大手生命保険会社との間で契約を結んでおり、病気や事故に遭った時の入院給付金が一部支払われた} ということですよ。(N12)

以上から、統語的に「トイウコトダ1」も「トイウ」同様、伝聞のモダリティを担う表現として認めてよいと思われる。

以上のように「トイウコトダ1」は「トイウ」と同様の統語的性質を持っているが、異なる点も幾つか存在する。それは、「トイウコトダ」が「コトダ」という形式を得て、(12b)のように丁寧さという文法的カテゴリーを分化させたり、(12a)のように活用したり、(13)のように従属節中に入ったりできるようになった点である。伝聞のモダリティの代表的な形式「ソウダ」も対象に入れて考えると、「トイウコトダ1」は「ソウダ」により近い用法的な広がりを獲得したと言える。しかし「トイウコトダ1」は、(14)のように「ソウダ」にもない時制というカテゴリーも手に入れ、更には(15)のように引用部に依頼のモダリティ(よろしく((伝えて下さい)))を含むことも、「伝言した人をガ格で明示すること」(益岡・田窪(1992:131))もできる。このことは「トイウコトダ1」が、「トイウ」や「ソウダ」と比べ、より直接引用文的な性質を持っていることを表している。

(12) で六日目の30日、警察も気づかなかった山道わきの崖下に勝雄さんが車ごと落ち、倒れていたのを発見した(12a)ということ^で、おまえ生きてたのかという言葉投げかけた(12b)ということ^{です}。(ワイド)

(13) しかし、日本のほとんどの企業というのは内需企業であったり、あるいは生産性

の低い企業だということですからね、そういう意味では組合とか連合とかいうのは…（春闘）

- (14) 元住民の話によると、この辺りには大きな沼があったということだった。
(15) 田中さんがあなたによろしくということです。（益岡・田窪（1992：131））

4. 1. 2 「トイウコトダ1」の引用部情報と機能

テレビやラジオで報道されるニュースの内容は報告者（アナウンサーやリポーター）自身が情報源になることは、実況中継等の特別な場合を除いて希なことであり、報告する内容はほとんどの場合、自分以外の第三者から得た情報であろう。それにもかかわらず実際の談話では伝聞情報のマーカーが使われたり使われなかったりする場合がある。（注3）つまり、伝聞情報として提出したい情報と、そうする必要のない情報とに区別して情報が伝達されているのである。伝聞表現一般に当てはまることであり、森山（1995）でも指摘されていることであるが、これは、「トイウコトダ1」等のマーカーを使って伝聞情報をマークすることにより、発話者の「情報の真偽は関知しないが自分以外の情報ソースから得た情報をただ聞いたまま伝えてるのだ」という姿勢が現れ、情報の確実性に対して負う責任を回避したり、不確かさを暗に示したりすることができるためだと思う。

4. 1. 3 「トイウコトダ1」が現れる談話（話し言葉）の性質

「トイウコトダ1」は、「ソウダ」に比較して、伝聞の「トイウ」と同様書き言葉的な表現である。しかし、書き言葉での使用にかなり限定されている「トイウ」とは異なって、ニュース放送のようにもともと書かれたものを音声で伝達する場合（例(8)）、第三者によって書かれた情報（新聞等）を基に一部それを読み上げながら口頭で紹介する場合（例(16)）（注4）等、報告を目的とした談話では話し言葉にもよく現れる。また、一人の発話者が不特定多数の聞き手に向かって一方的に報告を行う談話だけでなく、日常的な対話の中の伝聞表現として使われること（例(17)）もある。

- (16) このご夫妻はですね、都内にひやくじゅう、50坪ほどの豪邸を構えているということで、下の方をご覧ください。写真が出てるんですが、写真に出てるのはこのガレージだけでね、そんなに大きい家かなというふうに思えるんですが、よく考えたら、全体が捉えられないほどの大きなお家なんだということがよくわかりますけどもね。ま、それはいいんですけどどうもそういうお家に住んでいた二人なんですけれども、同じ敷地内にはさくらさんの両親も暮らしていたんですが、…（ワイド）
(17) リポーター：（長銀元頭取の）退職金が9億円以上出たということなんです…
長銀職員：いや、それはよくわかんないんで…（NJ）

4.2 物語再現の「トイウコトダ2」

この分類に当てはまるのは以下のような例である。(18)は、司会者と複数の討論者というディスカッション形態の談話からとった、発言の中で自らの体験談を披露した談話で、メイナード(1993)で「会話物語」と呼ばれているようなものである。(19)は講演者自作の資料に沿って行われた講演の談話の一部である。その講演資料には要点が箇条書きに記されていて、「残業もある／電話にも出る／社内会議用の資料も作る」という資料の記述に沿った形で、(19)該当部分の発言がなされている。

- (18) だから私はむしろ父親の持つてる戦後というのはむしろ母親にね投影したんだなあと思ったことがありますね、その、私の家に、兄嫁が現れたと、兄と結婚してお嫁さんが家に来たと、そして新婚生活何ヶ月たつと、この、あ、あ兄嫁と兄が夫婦喧嘩始めると、するとね、兄貴が母に呼び付けられてね、「よそから来たお嫁さんをね、泣かせるようなのは男の風上におけない」って、こう母親は言うんです。(家族=(2)再掲)
- (19) で、えー、(同僚の外国人社員Wさんは)当然残業もやっていますと、それから、当然電話にも出て「はい」Tです」やっていますと、で、えーとマーケティングの部署ですから新製品に関する資料、会議、色々あるわけですね。そういったものを作らなきゃいけない。(講演)

4.2.1 「トイウコトダ2」の統語的性質

この分類に特徴的なのは、(18)に見られるように引用部の述語(「現れた」「来た」「始める」)の時制(「ル/タ」)の区別をはっきり示さなくてもよいことである。それは「ト」の引用部が、現実の発話時間と切り離された事態として描かれていることを示している。この統語的な性質は、後述する「トイウコトダ2」の機能や現れる談話の性質——引用部の内容が現在の発話の場とは違う場に属する「物語」であること——と深く関係している。(注5)

また、この分類で「トイウコトダ」まで言い切る例は集められなかったが、「イウコトダ」をつけたとしても、引用部全体をスコープとする、疑問文や否定文にならない等の統語的性質は「トイウコトダ1」と同じだと考えられる。

4.2.2 「トイウコトダ2」の引用部情報と機能

引用部の情報源は自分であり、その情報は、過去に自分が体験したりして得た筋書きが既にできている物語のような談話である。「トイウコトダ1」と同様、引用部は2文以上になってもよく、「ト」でくくられた談話の総体は話し手のいる場面から切り離されたものとしてまとめ、筋の存在する物語として再現される。これは拙稿(1998)のB類にあたるものである。このB類のト切れ文を「トイウコトダ」という直接引用文に由来する形式の下線部が落ちたものだと考えるのは、引用者自身の視点から描写する一方、別

の場を意識させつつ情報を再現させる働きをする、というところに二重の場を持つ直接引用文との関連が認められるからである。このように「ト」をつけ、自己を情報源とする情報をわざわざ引用の形で提示するのは、「引用」を前面に出すことで発話の場とは違うもう一つの場の存在を示したいという発話者の意識の顕れだと考えられる。

また、本稿では、「トイウコトダ2」の機能は、そのような仕方でも情報を再現し、再現した情報が描く事態をそのまま情報の受け手に差し出すところにあると考える。「トイウコトダ2」は情報ソースの点で、自分以外の第三者を情報源とする伝聞の「トイウコトダ1」とは異なる。しかし、「情報を叙事的に伝達する」という姿勢は伝聞に通ずるものがあり、その意味で伝聞との接点が認められるのである。

4. 2. 3 「トイウコトダ2」が現れる談話（話し言葉）の性質

自分のエピソードをナレーション的に披露する時(例18)、自作の要点のみを記したカードや講演／発表資料を見ながらそれに基づいて口頭発表する時(例19)等に現れる。

拙稿(1998)でも指摘したが、「トイウコトダ2」には文末に位置するもののみならず、間投助詞的に使われるものもある。下例のようにメモを見ながらスケジュールを確認する場合である。筋書きができているものをそのまま再現するという意味では講演資料を見ながら発表する場合と同様、自己情報源の情報を組み立て談話を作り上げる際に現れるものである。

- (20) 7月中はテキストの改訂をしてと、8月下旬にプレイメントテストを作ってと、そして…

4. 3 推論結果の説明の「トイウコトダ3」

この分類に入るのは、以下のような例である。

- (21) 司会：三好さん、この鉄鋼の方式ですね、こういったものがこう他の企業にこう広がっていくってそんな見通しはどうですか。
三好：あ、あの一、多少は広がるでしょうけどね、やはりそのベースアップの隔年交渉春闘というのは、隔年交渉というのは、経営者側にとっても非常にきちっとした計画がないといけないということですね。こらあ労働者側も同じですけどね、見通しがだから相当あの一きちっとしていくということと、うーこれは結局労働側もベースアップその春闘そのものがベースアップではないと、のみだけではないと、他の事がたくさんあるんだという点、鷲尾さん、自ら失言しとるようなものですよ。
鷲尾：失言してないです。それは他のことで重要なことです。(春闘)
- (22) 古館：喫茶店やったことがあるんすか、実家が。
椎名：あります。

古館：あ、そう。

椎名：だから喫茶店の2階で生まれたんですよ。

古館：喫茶店の2階で生まれた。

椎名：はあ、2階が住居で、当時。

古館：はあ、そうか、じゃ、コーヒーで産湯をつかったっていうことですか。

椎名：ああ、あの、

古館：イメージとしては

椎名：イメージとしては、あ、そうですね。

古館：あ、そう。

椎名：ミルクの代わりにコーヒー飲んで（おしゃれ）

(23) 大桃：赤い糸とはあまり縁のない私でございますが本当です。

古館：なるほど、見えない赤い糸には縁がないと、今のところね。（質問）

4. 3. 1 「トイウコトダ3」の統語的性質

「トイウコトダ3」は、「トイウコトダ1・2」と構造の面から大きく異なっている。それは、「トイウコトダ1・2」のように先行する部分が（時には二文以上の広範囲に渡って）スコープ内に入るのではない、という点である。次例ではカラ節は、「今日は運動場は使えない」という判断をした根拠となっている。

(24) 地面がこれだけぬれているカラ {今日は運動場は使えない} ということだ。

従って、「トイウコトダ3」のスコープに入っている部分を(26)(27)のように疑問の焦点にすることができる。例(27)の矢印の箇所が発言は、「(新婚補助が多い) ちちゅうことは、(収入がどんな状態だということですか)」のように復元できる。また、(22)(23)(25)のように確認要求の機能をもつ文にもなる。つまり、「トイウコトダ3」は、「トイウコトダ1・2」にはない疑問文の形式を持つのである。

(25) 地面がこれだけぬれているから、「今日は運動場は使えない」ということですか。

(26) 地面がこれだけぬれているから、「どうなる」ということですか。

(27) (ゲストが大阪市から新婚補助として月額2万5千円もらっているという話を
して、)

司会：あ、それじゃ、2万5千円というのは、一番もろうてる方？すくない方？

ゲスト：一番多いんですわ。

司会：一番多い。

ゲスト：ちちゅうことは、

→ 司会：ちちゅうことは、

ゲスト：僕の給料が安いということです。(新婚)

4. 3. 2 「トイウコトダ3」の引用部情報と機能

「トイウコトダ3」の引用部内のスコープの及ぶ箇所は、先行する談話から発話者によって導き出された推論である。例えば(22)では、「椎名が喫茶店の二階で生まれた」という先行談話を基にして発話者が「椎名はコーヒーで産湯をつかった」という推論を導き出し、その妥当性を聞き手に問うている。これは、拙稿(1998)のC類にあたる。先行文脈から導き出した自分の推論を表明するものであるため、(22)(23)のような疑問文では確認要求の機能を担う文になるが、平叙文の場合は(21)のように、判断のモダリティの一つである説明の機能を持つようになる。実際、この「トイウコトダ3」は、全て説明のモダリティ表現である「ワケダ」と交換可能である。

また、(21)に見られるように、「トイウコトダ3」は「ワケダ」と同様、推論の根拠となる文脈が明示されていない場合でも使うことができる。しかし、推論過程を経て産出された結果であることが暗示されるため、そのような場合でも「自分の意見を誰もが納得する論理的な帰結として提示する」ニュアンスを与えることができる。伝達する情報の内容に推論過程を含むという点で「トイウコトダ1・2」とは大きく異なるが、「トイウコトダ3」が持つこのニュアンスは「トイウコトダ1・2」に共通したものだと考えられる。つまり、この「自分の発言には論理的な筋道が既に存在するのだ」と説得するような情報伝達の仕方は、「トイウコトダ1・2」の、「発話以前に入手し発話時点で既に存在する情報をそのままの形で伝達する」という姿勢に由来すると考えられるのである。この叙事的な伝達の仕方により、発話者の推論を述べる際に使われる平叙文の「トイウコトダ3」のコンテキストの中では、「もう事態は既にこうなっていて、それを私はそのまま伝えているのだ」という意味合いで伝達することになり、やや一方的に自己の発言の正当性・客観性を表示しているという印象を聞き手にもたらすのである。

4. 3. 3 「トイウコトダ3」が現れる談話（話し言葉）の性質

「トイウコトダ3」は、「トイウコトダ1」のような「報告」を基調とした談話や、「トイウコトダ2」のような「物語」の部分に出る談話といった談話の種類にはあまり強く限定されない。広く日常的・一般的な対話や独話（聞き手は存在するがターンの交代がなくある程度の長さを一人で話し続ける談話）の中で、自分の意見を説明する際に平叙文の形で現れる。また、先行文脈から導き出された推論（自分なりの解釈）を提示してその妥当性を確認する際に疑問文の形で現れる。

以上を次表1にまとめる。

	トイウコトダ1	トイウコトダ2	トイウコトダ3
引用部の情報の性質	発話者が自分以外の情報源から得た情報	発話者自身が情報源となっている情報	先行文脈から発話者が導いた推論
「トイウコトダ」のスコープ	情報のソースをマークする部分以外は全てスコープに入る。また、伝聞のモダリティ「そっだ」と同様、二文以上を引用部としてくくりに入れる。	談話の総体がスコープに入る。また、そのスコープの及ぶ範囲は「トイウコトダ1」同様、2文以上でもよい。	推論を表示する部分のみスコープに入る。
「トイウコトダ」が使われる場合	ニュースなど、書き言葉原稿を基に報告する場合や、新聞などの書かれた情報を引用しつつ紹介する場合。また、日常的な対話・独話の中で伝聞情報を伝達する際に。	ナレーション的にエピソードを披露する際や、要点のみを記したカードや講演資料を見ながら口頭発表する際に。(間投助詞的にも使われる。)	自分の意見を説明する際や、先行文脈から導いた自分なりの解釈を提示しその妥当性の確認を要求する際に。
談話の中での機能と効果	引用部の情報の真偽は問題にせず、単に第三者から得た情報を伝える伝聞機能。発話者の「情報の真偽については関知しないがただ聞いたままを伝えているのだ」という姿勢が表れ、情報の確実性に対して負う責任の回避や情報の不確実さの暗示ができる。	過去に自分が体験したりして得た情報を、叙事的にそのまま再現する機能。「引用部の内容が現在の発話の場とは違う場に属する『物語』である」という意味付けで情報を伝達することができる。	「ワケダ」等のモダリティと同様の説明の機能。平叙文の場合「自分の発言には論理的な筋道が既に存在する。もう事態は既にこうなっているのだ。」というニュアンスで叙事的に意見を伝達するため、やや一方的に主張しているという印象を与える。
その他の統語的性質	疑問文・否定文は作れない。	同左。また、引用部の時制「ル・タ」の区別が明示的ではない。	スコープの及ぶ範囲が他の二つとは違うため、疑問文が作れる。

表1

5. おわりに——「トイウコトダ」の共通点と「ト」を使用する動機

「トイウコトダ」1、2、3の差異は表1の通りであるが、これらに共通した性質は、「トイウコトダ」という表現の基になっている直接引用文に由来するものであると考える。つまり、直接引用文の「誰かの発言をそのまま再現する」という本質的な性質が、「トイウコトダ」の引用部情報の伝達の仕方——叙事的かつ客観的に情報を伝えるという姿勢——に連なっていくと考えるのである。その姿勢は、「発話者以外の人が「○○」と言う」に代表されるような直接引用文に最も近い「トイウコトダ1」に最も顕著に認められ、「推論した発話者自身」が、関与する「トイウコトダ3」でも、ニュアンスの形で間接的に認められるのである。

また、本稿では更にこの「トイウコトダ」（及び「ト」）が頻用される理由も、「トイウコトダ」が直接引用文に由来していることにあると考える。つまり、「トイウコトダ」（及び「ト」）は、引用部（「○○」部分）に直接引用の形をとることができるため、間接引用化の際行うべき「引用部の発話の場への調整」が不必要で、引用部の内容を情報提供者の視点から提示できるのである。また、その直接引用部は、野田(1989)で挙げられている「真性モダリティを持たない文」の一部に当たると思われ、線段的に連続と続く話し言葉の中の大きな区切りを表す。(注6)談話の中で一応の区切りはつけたいが、まだ明示的な形で文を終わらせたくないという発話者の欲求が、引用部を導く「トイウコトダ」、そしてその「イウコトダ」部分が落ちた「ト」の頻用につながるであろう。(注7)談話上の区切りを表すマーカーとしてこの形態的に短い「ト」が多用されるのは、限られた時間の中でより多くの情報を伝達するという意図にも合致していると思われる。

以上本稿では、拙稿(1998)で取り上げたB類・C類の「ト」の基になる表現を「トイウコトダ」と考え、伝聞のモダリティ表現である「トイウコトダ1」とも併せてそれらの差異、共通点を探ってきた。本稿で扱えなかった、言葉の意味の定義の際に使われる表現（「…ということは／のは、…ということだ」）や、「トイウコトダ」とメタ言語との接点を示す表現（確認をしつつ次の局面に話題を転換する接続詞「トイウコトデ」等）については、「トイウコトダ」1～3との関連も含めて、今後の課題としたい。

【注】

- 1 A類の「ト」は、実質の意味を持つ「思う」「言う」や「イウ（+名詞）」の部分が省略されたりしたものであり、その出自がわかるため、本稿で扱うものの対象外とする。また、D類は「ト」がメタ言語的に使われているものなので、同様に本稿では扱わない。
- 2 例(1)では{ }で表示されている様に、情報ソースを表す部分である「捜査本部の調べによりますと」以外の部分が全て第三文末の「ということです」のスコープが及ぶ「捜査本部が発表した情報」として一括りにできると考える。第二文の末尾（「明らかにになりました」）には、伝聞情報であることを示すマーカーはない。しかし、もしこれが別の情報ソースからのものであった場合、新たな情報ソースの表示が第二文の冒頭になされるはず（例えば「また、NHK独自の調査によりますと」等のように）である。従って、スコープは、第二文を越えて第一文の「毒物混入事件が」から、「ということです」の直前まで及んでいると考えられる。

- 3 ここで述べている「伝聞情報のマーカーが使われたり使われなかったりする場合」には、例(1)の第二文のような、「談話のレベルにまで広がる伝聞のスコープによって伝聞マーカーを表示する必要がない場合」は含まれていない。
- 4 例(1)の情報源となった新聞記事(夕刊フジ98.7.31)原文では「夫妻は都内に百五十坪ほどの豪邸＝写真＝を所有。同じ敷地内にはさくらさんの両親も暮らしていたが…」となっている。
- 5 物語文の時制については工藤(1995)に詳しい記述がある。
- 6 野田(1989)では、真性モダリティを持たない文が現れる環境として、①従属節や引用節のような働きをして他の文に従属している場合、②文章・談話の枠に依存している場合、の二つを挙げている。野田(1989)は談話における引用を中心に論じたものではない。しかし、本稿で扱った「トイウコトダ2」と上記②をはじめとして、扱っている現象に重なる部分が多く大変示唆に富んでいる。「真性モダリティは持たないが文相当の働きをするもの」の存在は、視覚的に文の終わりが見えない話し言葉の分析に一つの糸口を与えてくれるものであると考える。
- 7 「トイウコトダ」と最後まで言い切らず「ト」で止めた場合は更に、①「トイウコトダ/デス/ダッタ/デ」等の文末の丁寧さ/時制/活用形を表示する手間が省ける、また、②後でいかようにも文末を選択する可能性を残すことができる、といった利点が生まれると思われる。

【参考文献】(本文で参照したもののみ)

- 井上 和子(1983) 「日本語の伝聞表現とその談話機能」『言語』12-11 大修館書店
- 加藤 陽子(1998) 「話し言葉における引用の「ト」の機能」『世界の日本語教育』8 国際交流基金日本語センター
- 工藤真由美(1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房
- 砂川有里子(1988) 「引用文における場の二重性について」『日本語学』7-9 明治書院
- 泉子・K・メイナード(1993) 『会話分析』くろしお出版
- 野田 尚史(1989) 「真性モダリティをもたない文」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1992) 『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版
- 森山 卓郎(1995) 「「伝聞」考」『京都教育大学国文学会誌』26 京都教育大学国文学会

【資料出典】

- (規制) NHK 「日曜討論 なぜ規制緩和は進まないのか」94.11.2
- (春闘) NHK 「日曜討論 今年の春闘とこれからの春闘の行方」97.3
- (質問) NHK 「クイズ日本人の質問」98.8.23
- (ワイド) 朝日放送「ワイド!スクランブル」98.7.31
- (家族) フジテレビ「報道2001GW特別企画 家族はどこへ 親子の自立と未来」97.5.4
- (新婚) 朝日放送「新婚さん、いらっしゃい」97.5
- (おしゃれ) 日本テレビ「おしゃれ関係」98.8.23
- (講演) 国際大学日本語6(中級)授業 外国人留学生向けミニレクチャー「日本企業の採用方法」97.2.4
- (N7) NHK 7時のニュース 98.8.23
- (N12) NHK 12時のニュース 98.8.25
- (NJ) フジテレビ LIVE'98 ニュース・ジャパン 1998.8.25

(謝辞) 本稿に関し、筑波大学砂川有里子先生より貴重な御助言・御指導をいただきました。ここに記し、深く感謝申し上げます。

(かとう ようこ 国際大学大学院 国際関係学研究所 日本語プログラム講師)